
家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

難波 壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！　自由な風、来る！～改～

【Zコード】

Z6945Y

【作者名】

難波 壱

【あらすじ】

『家庭教師ヒットマンREBORN！　自由な風、来る！』の

改版です。

風間南は交通事故に巻き込まれ、死んでしまった。しかし神の手違ひだつたため『転生』することになった！転生先は『家庭教師ヒットマンREBORN！』の世界！～面倒くさがりや&自由過ぎる性格の南はどうするか！？

南の第一の人生が幕を開ける…

Straordinariamente

登場人物！

カザマ
ミナミ
南

性別 女

年齢 12

身長 165cm

体重 45kg

一人称 オレ

誕生日 9月7日

性格 自由、冷静、興味ないと全然反応を示さない、面倒事が大嫌い、仲間は人一倍大事にする

髪の色 茜色

目の色 黒

髪型 ショートカットで、毛先が外側にハネている

目の形 フランと同じだが、目の下のは無い

ファッション 黒、白、青、緑、赤、などの男モノ系

アクセサリー 金属（銀色のみ）、黒や白っぽい色のモノ
(シンプルなモノ)

ピアスを両耳3つ付けてる

必需品 ケータイ、財布、iPod touch、リングペンダン
ト、小型ノートパソコン（電子辞書サイズ）

十雅トオガ
(神)

性別 男

年齢 不明（本人は『3万年以上は生きてると思うんだけどなー』
と言つ）

身長 175cm位（南の予想）

体重 不明

一人称 オレ

誕生日 不明

性格 前向き、好奇心旺盛で思ったことはすぐに行ひ、余計なことを言つことが多い

髪の色 金と銀が混ざつたような色

目の色 空色

髪型 南と同じ位のショートカットだが、天パ

ファッション ラフな服装

アクセサリー 特にない

必需品 特にない

山下咲

ヤマシタ サキ

性別 女

年齢 12

身長 148cm

体重 44kg

一人称 私

誕生日 12月15日

性格 明るい、誰にでも優しい、無邪氣、自分では気づいていない
が自分第一で自分勝手

髪の色 茶色

目の色 茶混じりの黒

髪型 ロング（腰あたりまである）だが、いつもはお団子にしている

ファッション 清楚系（特に白、薄ピンク）

アクセサリー かわいいものが好き

必需品 ケータイ、ポーチ（くし、鏡など）etc

名前の由来を話しておきます。

まず、主人公の『風間南』。

『南』は男でもありそうな名前にしたかったからですね。

『風間』は…。

三文字がいい、と思って、そこからは何となく…。

『十雅』は…。

『神』 = 『GOD』（逆から読む）『ゴッド』（何かがあった）

『十雅』です。

何があつたのかは…。

私の気まぐれでこうなりました。

そして『山下咲』。

これも何となくですね。

あるとしたら、名前順とかいなる時に後ろの方にさせたかったんです。

『や』だと南の苗字、『風間』と離れるので。

こんな理由があつてこのよつたな名前にしましたー。

これからも新キャラ出す時に由来を話していくと思います

Episode 01 むかつく神と会つて

オレの名前は風間南。

性別：女。

なつたばかりの中学校一年生…とはいっても私立の小学校から中学になつただけだからあんま変わんねェかな。

今は、ズボンの制服着て、カバン持つて信号待ち中。

あ？なんで女なのにズボンの制服かって？

ンなモン、スカートなんて着たくねェからに決まってんだろー！

あ、信号が青になつた。

「ふう……」

オレはやつへつと信号を渡り始める。

メンドクサイ。何もかもが。

学校行つて何になる？

オレには何にもならない。

… もう、アイツはないから……。

「…つまんねーの」

そう、呟いた時だ。

キキイイイイイツツツツ！－！－！－！

ドカアーンツツツ－！

「－－－？？？－－！」

オレのすぐそばでトラックと軽自動車の交通事故発生。

あ…。

オレのほうに来る－－？－－？－？

ドンツツツツツツ－！－！－！

オレは見事に巻き添えをくらい、どれだけのスピードをだしていたのか、数メートル先まで飛ばされた。

「キヤアアアアツツ！..！」

「おこひー。意識はあるかー！？」

「あー、救急車を呼べー..！」

オレの近くで「ひゅわわ」と声がある。

あー、意識はあるよ..。

「..」の赤い血みたいな液体は？

あ、オレの血？

そうだよな、巻き添え食いつたもんな……。

死ぬのかな……。

ま、いつか。

悲しむ親はといへの昔に死んだし……。

それに、親はオレが死んでも喜ぶだろ「し」。

ああ……これでアイツのとこに逝ける……？

思い出す……今までの人生を……。

……懐かしいな……。

「おい！！ 死ぬなよ！」

「大至急来てください！！」

ああ、救急車、呼んだのか……。

でも……。

オレは眠いから……。

…それせひやーな。

「…じやなこと、オレはす ひとつオーマンを浮かべなきゃいけないんだ

「起きてへだわことよ。

起きたけど、知らない声なので寝たふりだな。

「……」

「…ニ…めニ…起れり、風間南ーー。」

「…なんだよ」

「おっ よつやく起きたか」

目を開けるが、やはり知らない男。

髪の色は金と銀が混ざったような綺麗な色で、目は空色。

外人か…?

「で？誰だよテメエは」

「ん？神だ！」

「冗談はいいから誰だよ」

「だーかーらー！…か・み・さ・ま…-!」

は？

「……信じてねって顔してんな……」

「アタリマエ。」

どこにいきなり『神』つつわれて信じる奴がいるんだよ

「え？ 案外いるぞ？」

「……本当にそんな奴いたら見てみたいな」

「まつその話はおじといて。

なんでここにいるか分かるか？」

「うひつわれても……。」

なんもない、あたり一面真っ白。

来たことが無ければ、見たことすら無い。

真っ白過ぎて天井があるのかも分からぬ。

あ……。

「死んだ…からか?」

「おお…！オマエは優秀だな…！正解だ」

「やつぱりな…。

んで、オレになんか用?つつか?」

一番疑問に思つてゐることを聞いてみた。

「ヨリは……まあ、狭間みたいな場所だ。

神と、神が許可した者した入れねーんだぜー！」

あー、こーやつて『自分は本物の神様です』と言ふやつとしてんのか…。

残念、オレにその手は効かねーよ。

「反応薄いな…まあいいけどよ」

「で、どうして死んだからつて狭間なんかにいるんだ？」

天国なり、地獄なりに早く連れてけよ」

オレとしては、アイツがいる場所希望だな。

「ああ、じゃあ説明しないとな……悪い」

…こきなり頭を下げて謝られた。

「何が?」

「あるといひの野はバツの悪そうな顔をし、いついついた。

「オマエが死んだの、オレの手違いなんだわ」

…………。

「や、殺氣を取めてください…」

今度はビクビクしながら言ひにきた。

「あのやー、そんなの無理に決まつてるよな?」

勝手に殺されたのに、さらに謝罪の気持ちが全く入っていない謝り方。

…ケンカ売つてんのか、このクソ野郎?」

オレは満面の笑みで言つてやつた。

田は笑つてないけどな。

「うひめんなさいイイ

男はとつさに土下座した。

うん、正しい判断だな。

「それでいい。ずっとそのままじゃん」

「ハイ…」

「で？オレは」のままよく分かんね！」の真っ白な世界で生きてい
くのか？」

「いえ…転生してもらいたいのですが…」

は…？

転生？

よく小説とかである、あの転生か？

「なんでだよ」

「普通喜ぶ場所だと思いますが…。

理由は、あなたは本来まだ生きているので、天国にも地獄にも逝
けないんです」

逝くつて…。

「なので、ほかの…つまり、さつきまで居た世界とは別の、元から“風間南”という人間が存在しない世界についてもらいます」

「オレが…元からいな世界？」

「ハイ…そっすればあなたは生きられますし、オレも面倒なことしなくて済みますしね」

てへっ、と右手を頭に当てながら話す男。

ピキィイツ！

あ…オレの中の何かが切れた。

「それで、行く世界なのですが……って、えー？」

「……………」

「んでもどの世界に行くんだ?」

オレは、全身ボッコボコになつた男に向かつて聞いた。

なんでこんなにボッコボコになつてんだりうな。

笑えてくる。

「か..『家庭教師ヒットマンREBORN』の世界です...」

「...リボーン...あれはマンガの世界だぜー...?」

「はい……ダメですか……？」

男はビクビクしながら聞いてくる。

「…メンヂくせーけど、いいぜ…原作も知つてゐしな」

知つてゐ、つつてもせいぜいジャンプで読んで、小説はレンタルで
読んだ程度だけだ。

だから正確にはあんま覚えてない。

確か…アレだろ?

戦い嫌いなダメ人間の沢田綱吉がリボーンと会つて、マフィアにさ
れしていくっていう…。

ま、トキトーに過(ハ)セ。

オレが言(ハ)ヒと男は花が咲(ハ)いたよ(ハ)うな笑顔(ハ)になり(ハ)。

「じゅあ、すぐに行(ハ)きましょ(ハ)ーー。」

立ち上がりつてオレに手を向けた。

「は(ハ)、ち(ハ)い待(ハ)て、つ(ハ)てホント(ハ)す(ハ)ぐかよーー。」

オレの全身(ハ)が白(ハ)く光(ハ)り始めた。

絶対今すぐ行くことになんだろーー！

まだ聞(ハ)いてーことあんのによー。

「それじゃあ、第二の人生楽しんでくださいっーー！」

「このシッー！」

次会った時覚悟してろよ

！ーーー！」

ここでオレは意識を失つた。

真っ白な世界…狭間に一人残つた神。

「や、やつぱむつよい時間かけてからにすればよかつた…」

今更後悔している。

だが、もう遅い。

南はこの男、神に次会つた時にどうするかを決めていっているのだ。

「あ、オレの名前教えるの忘れた…」

また後悔が増えた神だった。

Episode 2 神からの贈り物！

……は？

オレは確か……。

ああ、そうだった。

勝手に神に殺され、さらには勝手にリボーンの世界に転生させられた
んだつたな……。

でも……は？

オレはベッドで寝ていた。

辺りを見渡すと、なんだか見慣れた風景。

なんだ、オレの家じやん。

起き上がると、紙が一枚。

こんなモノ、オレは置いてなかつたな。

…誰からか、想像できたので読んでみた。

『どうもー神です！

これは、言い忘れたことを伝えるために書きました！

まず、オレの名前を教える。オレは十雅トオガー！

いらっしゃる神だつて、名前くらいはあるんだぜ？

今度会つたときは、十雅つて呼んでくれよな！

次に、オマエが今いる場所は、この世界でオマエの家となる場所だ！

かなり高級マンションだからな。

もちろん一人暮らしだ。

冷蔵庫に一週間分くらいの食いもんは入ってる。

贅沢な生活ができるぜー！

次に……この世界でのオマエの設定だ。

両親はすでに他界。

理由は、前世の両親と同じだ。

今は中学生だ 沢田綱吉と同じ学年だからな。

まあ、オマエ自身の情報は前世からの続き、といった感じだな。

前の学校を辞めて、並盛町に引っ越し、並中に通うことになった。

まあ、こんな感じだな。

制服はもちろん男子用。

許可も貰つてあるから安心して登校しない。

ああ、クローゼットの中に入ってるからな。
学校に持つていぐものはベッドの横に置いてあるカバンの中に入
つてゐるからな。

そん中のモノも説明しどくか。

まず、並中の学生証。

次にケータイ。

これはオマエが前世で使つていたモノと全く一緒だ。

三つめは財布。

金は五千円程度だが減つたらオレに言えよー。

生活しやすこへりに増やしてやるから。

家賃や光熱費もだしてやるよ。

んで、iP ot tou ch。

これは、無いと暇つぶしきねエだろ？

最後に、オレからの贈り物だ！

小型ノートパソコンの形をしているが、特殊能力のようなものが

いっぽい入つてこる。

もちろん、普通にパソコンとしても使えるからな。

かなり軽いから持ち運びも便利だぜー！

家にあるものは前世のオマエが持っていたモノに少し足した程度だ。

…まあ、じょくじりいかな。

じゃあ頑張れ！

オレのことを呼べばオレは出でてくるし、オレに会いたいって思っているから寝ねばやつたの狭間の世界でオレに会えるからやー！

じゃーなー！

十雅

かなり長い手紙を読み終え、ベッドの隣に置いてあったカバンを取る。

革製じゃない、フツーのスクールバッグの黒。

なんだ、これも前世と同じかよ。

なんか同じモノばかりで転生したって感じしねーな…。

中身を確認すると、手紙に書いてあつたものが入つてた。

並中の学生院。

…ああ、やっぱオレは転生したんだな…。

この世界には、アイツはいるんだろうか？

前世でのたつた一つの悔い。

…もう一度目の人生だ。

この人生で悔いは絶対にしたくない。

そう思い、時間を確認する。

7時10分頃。

転校初日に遅刻はしたくないので朝食を作る。

…とはいっても、パンを焼くだけ。

そして制服に着替え、前世でも常に付けていたリングネックレスをつけ玄関に行く。

鏡を見たところの姿は前世と変わっていなかつたので安心した。

……もし変わつてたら鏡見るたびに『誰だ?』になるしな。

ま、よかつたな。

重たいドアを開け、家を出る。

ああ……前世の家を出た風景を随分違う。

……もう、オレが知つている風景は家以外に無いのか……。

後悔や、名残惜しい気はしない。

ここから… 今から、オレの人生は始まるのだから。

以後して、オレの第一の人生が幕を開けた。

Episode 3 並中！

「あーあ…疲れた」

オレは今登校中だ。

只今の時刻、7時40分。

ダルイからゆづくり支度した。

それにオレは朝弱いからな。

ハア、とため息をつき並中へ向かう。

なんで並中の行き方が分かるのかって？

……ホント、何でだるうな。

あ……迷ひぬけマシか。

だんだん並中が視界に入ってきた。

ふむふむ。確かに並中だ。

どんなだつたかは忘れたが、『並盛中学校』って書いてあるし。

オレはゆっくりと並中に入っていった。

登校時間は約8分か。

良くも悪くもない。

近すぎるのは嫌いだし、遠いのも嫌いだからな。

ちょっとだけ十雅に感謝した南であった。

「名前、住所、電話番号といったものしか分からなかつたのですが

草壁といわれた男は少し戸惑いながら言つた。

「それが…」

並盛最強といわれている雲雀恭弥が自分より、はるかに大柄でリーゼントの男に聞いた。

「草壁、今日転校してくるっていう転校生の書類は？」

同時刻、応接室。

「…

「…………」

「…委員長?」

返事をしない雲雀を不思議に思つて、草壁は雲雀に声をかけた。

雲雀は無言で草壁から、少しづか書かれていな転校生の書類を取る。

「風間南…久しごとに楽しめそつだよ」

雲雀は楽しそうに南の書類を置いた。

そんなことも全く知らず、南は職員室へ向かう。
自分のクラスが何組かを知るためだ。

「今日、転校生が来るんですよ？」

「やつなんですよ。私のクラスになりました」

一人の女性教師と男性教師が話していた。

おやじく今日来る転校生は南のことだ。

「1・Aですかー。風間さん…でしたわよね？」

「ああ、風間南といいう感じですよ。問題児でないことを祈るばかりですね」

南はそれをしつかり聞いていた。

だが、別に怒つている気配はない。

『教師が新しく来る生徒は問題児ではないことを祈るのなんて普通

じゅね?
『

と想つてこらからだ。

「 1 - A ね …」

南は職員室に行かなくともクラスが分かつたため屋上へ行くこととした。

『並中とこえば、やつぱにまー屋上だよなー』 といつ理由からだが…。

今、原作開始からどのくらい前、または後なのか。

「」で南に疑問が一つ。

まだ朝早く（とこつてももひつ時50分は過ぎてこぬが）屋上には誰もいなかつた。

「おおー、」が屋上かあ……

「…………まあ、教室行つたら分かるか」

考えても無駄だと分かり南はボ
ッとしてこゝれりこした。

キーンゴーンカーンゴーン…。

学校中にチャイムが鳴り響いた。

「8時の予鈴か…ふああ…」

南を睡魔が襲つた。

改めていうが、南は朝がとても苦手だ。

もちろん睡魔などに勝てるハズもなく、勝とうともせず

。

南は壁に寄りかかってグッスリと寝てしまった。

キーンコーンカーンコーン。

「……んー？ 8時25分の予鈴

？

仕方ない…そろそろ行くか…」

南は珍しくしっかり目が覚め、ゆっくりと教室に向かって行つた。

「席に着けー。転校生を紹介する

あれから教室に向かい、担任に『よく教室わかつたなあ』と言われた。

時間もギリギリではあつたが間に合つた。

「よし。風間ー、入つて来い」

「……」

無言でドアを開け、教室内に入る。

「転校生の風間南だ。風間、自己紹介をしろ」

教師は黒板に『風間 南』と書いた。

「風間南だ…。あー、一応女子だけど、まあ気にしないでいい。

…席つてどうだ?」

『自己紹介か?アレ!?』と言いたそうな奴が何人かいるがドーテモいい。

『かつこいい…』とか言つてる奴もいるが、無視だ無視!!!

「あ…ああ。そこの、一番窓側の席だ」

見ると、一番窓側で一番後ろの席が空いていた。

そのまま机の席に歩いて行って座った。

原作はつと…。

教室内を見渡すと、まだ獄寺もいない。

原作開始前なのか？

…まあいいか。

オレは今寝ていいのだと元気とした。

「よつ十雅！..」

ただ寝るのもなんだかつまらないと思い、十雅に会いにいったのだ。

「あ、来たか！んで、ビーカしたか？ってまた

ギニやあああああ……」

「当たり前だあ……よくも待てと書つてこのに勝手に送り込みやがったな！！

名前で呼んでもらったのを感謝して欲しいくらいだ……」

「うう…すみません…」

十雅は正座して言った。

「ふん…まあいい。

それより、今原作開始までどのくらい時間あるんだ?」

「えっと…体育の授業から開始です」

「こつのだよ

「え…それは…忘れちゃいボブウ…!…!」

十雅が忘れた、と言いつになつた途端、南のアッパーがヒットした。

「使えねーな……じゃあオレはもう行ぐ。

じゅーな！

「あー…うちゅうちょっと待つてー

… つてもういね ！！！

… 言ふ忘れたことがあったのに…」

十雅の叫びがこだました。

パチッと田が覚めた。

「ねえねえ風間さん！」

「どじから来たの？」

ワイワイと知らない間にオレを囲んで群れができていた。

イラッときたのはさすまでもないだろ、。

「風間あーん！」

「…ひつむせえ。」ハから去れ。

目障りだ

「かつこい！」

卷之四

本当にウルセエの、わかんねーのかよ…。

ああ、なんかもうメンディ。

サボつてかーえろつ！！

「いいから散れ」

オレが殺氣混じりに言つと、皆が散つた。

ふう…これで帰れる。

今は休み時間。

教師が来る前に、と思いカバンを取る。

そして、のんびりと帰った。

帰り際に南は思った。

『転校初日からサボつて大丈夫なのか』

しかしそんなことを気にする南ではないのだった。

Episode 4 書に会つ！

並中に通つゝとなつて、2日目。

1日目はかつたるくなつて帰つた。

「あー、教師に何か言われそーだな……。

ま、無視すりやいつか

南は前世で、学校に毎日行くような人間では無かつた。

しかし、それで教師に怒られたことは無かつた。

だから今、南はのんびりと学校に向かっている。

それも既に遅刻している。

今は9時。

それなのに南は決して焦らない。

そして学校に着いた。

ガラララッ。

教室のドアを開けると、教師も生徒も皆、南を見る。

「キサマは転校生の風間だなー?」

教師が聞いてくる。

「…だつたら?」

「遅刻だ! 転校初日は無断早退。一田田は遅刻。

全く… とんでもない問題児が来てしまったようだな…」

ワザとらしく、声を大きくして言つてくれる。

「学校来て何になるんだよ? オレにとつてこの学校のレベルは低す
かる。だからタイクツ。

それに、問題児だと聞こたければ言えぱいいじやねえか。オレは
何だつていい」

ドカツ、と椅子に座る。

周りが『あの根津が押されてるーー』『すんばーいい気分』とか言っている。

根津、とこののはこの教師のことだろう。

「…いいだろ？。このことは校長にも話しておぐがな。
では、風間を無視して授業を進めるーー」

根津は授業を再開した。

だが南には、タイクツで仕方ない。

そして何を思ったのか、ふと席を立つた。

「……今度は何だ！？」

ため息交じりに聞いてくる。

「…………オレを無視すんじゃなかつたのか？」

「ぐへっ…………」

南はそのまま、教室を出た。

向かったのは、屋上。

誰もいない、静かな場所に行きたかったのだ。

ギイイ…。

屋上へと続く、ドアを開ける。

「…あり？先客がいたか…」

屋上には、学ランを着て眠る男子生徒がいた。

そしてその男子生徒は南に気付き、目を開ける。

「君…誰？今は授業中のはずだけど」

「授業なんかつまんねーから抜けたんだよ」

「…その赤い髪…1・Aに転入した、風間南だね」

男子生徒は立ち上がりながら聞いてきた。

「おひ、正解」

「君は昨日、無断早退をしていて、今日も遅刻している…。」

僕が今、口元で咬み殺してあげるよ」

「楽しそうだが、断る。口元で並盛最強の男、雲雀恭弥と戦いたくはないからな」

「あると、ピクリ、と反応した。

「…やつぱり、僕のこと知っているのか

「ああ。武器は仕込みトンファー。並中大好きな風紀委員長だろ?」

「……君、一体何者?」

男…雲雀はトンファーを構えながら聞いた。

「そんなに警戒しなくともな…。オレは風間南、それ以上でも、それ以下でもない、ただの一般人」

「一般人なわけないよね。現に君の情報をあまり得られなかつた

「（あーそりゃそうだらうな…）それは残念だつたなー。

じゃあオレは学校嫌いな自由を好む者、とでも考えておいてくれよ。

そして秘密主義者、とでも

ケラケラ笑いながら座は

何を思ったのか、雲雀はトンファーを下げる。

「…ビーしたんだ？」

「今、君を相手にしてもつまらな^{やう}だからね。殺^やる^氣がある時じ
やないと戦わないタイプだろ？」

「おっ正解 情報に追加しておけ。『気分屋』とな」

「ビーでもいいよ」

キーンローンカーンローン。

チャイムが鳴り響いた。

「あー、次は体育だつたな……」

「次の授業には出なよ

「えー……（あ、まてよ……確かにリボーンの始まりって沢田がボールに
顔面直撃するところだ……）

はあ、わかったよ

「じゅあね

「おひ、またな

いつもして南は屋上を出て行った。

そして教室には戻らず、そのまま体育館に向かう。

つまつ、制服のまま。

雲雀に『授業に出る』と叫われて『わかった』と答えたのに、早速約束を破っているが…。

「え… じいか…」

体育館の田の前に立ち、呟く。

もう授業開始のチャイムは鳴っていて、中では授業中だらう。

再び怒られるのもメンడクサイので、南せいっせつと見るひとによつた。

もちろん、主人公である沢田綱吉を。

「ぶつ」

ベチャツ、と沢田の顔面にボールが直撃した。

「……アイツが運動神經無いのは知っていた……だけまさか……こ
こまでとは……」

南はリボーンの最初の頃の話を知らない。

読んでいたが、黒曜編に入るまでは何となく流し読みしてた程度だ
つた。

第一話はしっかりと読んでいたのだが……。

なので知らないに等しい状況だ。

「……アレがリボーンと会って、あんなに変わるのが……」

沢田のダメダメっぷりを見ながら、南は呟いた。

それから数分経った。

沢田のダメダメっぷりに呆れ、南は帰り始めた。

「 もう… ジれから楽しむせてくれよ… ?」

遠くから誰にも聞こえないほど小さな声で、そり、言い残して。

Episodio 5 霧に会つ！

「こよひしゃ～！…学校休みイー！…！」

今日は学校休みでテンションMAXなんだ

え？学校あつてもサボって休みみたいなモンだろつて？

気分が違つよ～、気分が～。

休みみたいにことには定はしないけどな！

だつてや～。

学校サボつたらあの風紀委員長サンがオレを咬み殺しに来るんだもん…。

ああ、球技大会の日もサボって、商店街ウロウロしてた時に会ったのは大変だったな…。

「どーしようかな。

アイスでも買って食つか！…！」

そりゃ、オレは家を出た。

チョコと抹茶と悩んだんだよ。

なんで二個もかって？

オレは今、手にアイスが二個入ったビニール袋を持って歩いている。

並盛商店街。

“どうせ十雅の金だしいいや……つてな。

でも持つて帰るとアイス溶けちまつからな

。

おー！ベンチ発見～！

ベンチに座つて食うか

オレはベンチのある公園に向かつた。

「誰もいね。まあ、よかつたな…」

公園には誰もいなかつた。

オレ的には超嬉しいぜ？

つるやいガキ共がいなくて。

オレはベンチに座り、抹茶アイスを食べ始めた。

数十秒経つたら、公園に一人の女の子が来た。

オレと同じ年齢くらいだと思つ。

…なんか見覚えあるんだよな。

藍色っぽい肩下まである髪、同じく藍色っぽい大きな瞳、そして真っ白のワンピース。

誰だっけな〜?

クラスの奴ではないと想つんだけど…。

悩むのもイヤだし、声をかけてみるかー！

「おい！ オマエ一人？ 一人ならオレとアイス食わねェ？」

少女は突然声をかけられたことに驚いた様子。

「オレ今もう一個アイス持つてんだ。つい買っちゃったんだけど、溶けちまうからさー！」

「食つてくれねェ？」

「いいの…？ 私が食べて…も…」

「いいのっでか食つてくれー！」

「…ありがと…」

少女は顔を少し赤くして、オレからチヨコアイスを受け取り、隣に座つた。

「どういたしまして。オレは風間南」

「私は…風…」

「ああ、よひしづなー!風ー!」

そして軽く挨拶をして、黙々とアイスを食べる。

「なあ、風とオレって前にどうかで会つたっけ?」

「え…無こと思ひ…」

「だよなー…」

でもなんか知つた声なんだよ…。

リボーンの主要キャラ?

でも女キャラで……。

…………ん?

クロームってキャラがいたな。

確か骸の代わり、とか。

んん?

……クロームはもう一つの名前があつて……。

「あ……そうだ。だから見覚えあるのか」

「？」

声に出したから、風が不思議がついている。

クローム＝風だったんだよな……。

原作に出たのは少しだったし、小説ではつい覚えてだしな……。

「あ、いや……なんでもねえよー。」

「うふ…」

『ぬづけばねもひアイスは無くなつていた。

「… なあ、風はまだ時間あるか?」

「えつ…ひ、うん…」

「じゃあ、一緒に遊ばね?」

「い…いこの…?」

「モチロン…」

つつかオレ的には遊んでほしいしな

「… ありがとう。でも、どう行くの?」

「えーと、ちゅうとうひんきかれてるか?」

「うそ…」

やつ言いこ、オレ達は公園を出た。

オレは庭に並べ。

「ううだーー！」

「うう…？」

「ああ。『ハ・ナノモコーヌ』つづいて、ケーキがかなりウマいら
しこせーー。」

来てみたかったんだよーー！

「ケーキ屋さん？」

「あ、いらっしゃいませー。オレも来たことないんだけど……。とにかく中入る
つー。」

店の中に入った。

「いらっしゃいませー。」

「お、ケーキのいい匂いだ。」

「風、どれが食べたい?」

「あ……私、お金持つてないから……」

あー、散歩してたような感じだったしな。

「いってーオレがねー。ここまできたんだしー。」

「でもー」

「いってーこーへーはい、ウマセうまいー。」

「…ありがとー」

「どういたしまして。」

オレはチーズケーキにしようかな…皿は?..

「あ…同じの…」

「あー、こつも遠慮してんな…。」

「分かった。ちょっと待ってくれよー買つてくれ」

「…うん」

そして、ケーキを買い、凪と一人で食べた。

「ウマかった……噂は本当だつたなーー」

「あの……あらがとう……風間……君……」

「南でいいつて。ちなみにオレ、女だぜ?」

「え……」

凪は足を止めた。

「あ……」「あんなやつ……」

「こ、こや……しゃがみたうとだつて、仮正すんな。」

「でも……」

も、性別間違えぬなとこりがついたり假正かねよな……。

オレは弱じここだわ。

「えいや あれ、一〇約束してくさね？」

「約束……？」

「ああ。また遊んでくれるか？」

すると凧は満面の笑みを見せた。

「うそー。」

「んじゃ、それでチャウフーハード」

「でも…そんなのでいいの?」

「オレは全く気にしないからいいんだってーあ、あとメアド教えてくれ」

「あ、うん…」

赤外線通信をして、登録する。

あー、そういうや登録一人目だな。

前世ではアイツだけだったたし…。

ふつ、と笑みが零れた。
「…どうしたの？」

「あ、いや…何でもねえよ。んじゃ、いつでも連絡してくれよー。」

「うん。」

じゃあな、とお別れをして家に帰った。

一度目の人生で、初めて友達ができた瞬間だった。

Episode 6 風紀委員！

よつす！

南だ！！

皆さんに一つ聞いてもいいですか？

あなたはグッスリ眠っています。

時刻は朝の5時です。

その刹那、携帯電話が鳴り始めました。

マナーモードにしていなかつたので、『プルルルルルル』と音を鳴らしています。

携帯を見ると、知らない番号。

知らない人でしたし、もちろん出ません。

しかし、その電話は一回切れても何度も何度もかかってきます。

もう5分は経ちました。

でもまだ電話は鳴り続けます。

わへ、どうするー?.

その? 電話に出る

その? ムシを続ける

その? 電話を切る

オレがとつた行動は、?だ!!

理由?

なんかオレの第六感が、『出ないともうヒドい』ことになる』って察知したからだよ。

「もっしもーし」

『君、喧嘩売つてるの?』

「ー?この声、オマエ雲雀か?」

つたく何の用だよ…。休日のこんな朝早くに…」

『10分以内に応接室来て「無理に決まつてんだろー!それにイヤ
だし!』

来なかつたらどうなるか分かるよね?』

「…ワカリマセンガ?ソレガナニカ?』

『まあいいや。じゃあね』

一方的に電話をかけられ、電話を切られ……。

「オレつて不幸……」

行かないと咬み殺されるんだろうなー。

メンドクサイけど、戦うことになつた方がメンドイ。

「仕方ない……。行くか」

オレは嫌々私服に着替え、朝早い並盛町を歩いた。

「はー? 家つて…場所知つてんのかよー?」

「来たんだ。僕が家に行つて咬み殺さなきゃいけないかと思つてた
よ」

ガラツ、とドアを開けながら言つ。

「ンで? 何の用ですか?」

「校長に聞けばいいだけだよ」

「……なら来てよかつた……」

「うん……本当よかつた……。」

「でも、なんで私服で来たの？休日とはこえど、ここは学校だよ？」

ヤバい！――

南は直感した。

今の服装は、黒いダメージジーンズ、紫色のガラの入った長Tシャツの上に緑色のパーカー。

指や手首にはアクセサリーが付いている。

遊びにでも行くの?と言われそつた、到底学校に行くよつた格好ではなかつた。

しかし……。

「まあいいや。それより今日は前に話があつてね」

「あかつたああああああああ……！」

極悪非道の並盛中学校風紀委員長様から許しが出たよ～……！

「話?」

「うん。君、風紀委員に入り、「無理」

即答したよ?」

うん。

「断るのなら、学校に私服なんかで来た駄として咬み殺してあげるよ」

「や、それは一回にお断りシマス」

「せり、セリサインしなよ」

「オイオイオイオイ、勝手に話飛んでね? いつの間にオレが許可したみたいになつてんの? 」

「うるせこな。早く書いてよ」

「話聞けよ……」「マイツ……」

「む、無理……つい何オレに差し出して『契約書だよ』

あ、契約書? イリマセンケド?」

「だから、君に拒否権はないんだって何度も言つてるでしょ?」

早く書いてくれない？僕眠いんだけど

「オマエが朝5時に呼びだしたんだよなー！」

…条件次第で入つてもいいぜ？」

「…」
「…条件？」

「ああ！

一つ目、オレは朝早くに学校に来るつもりはない。一般生徒と同じ時間に登校する。

二つ目、無断欠席、無断早退、遅刻、そういうものを全て許可する。

三つ目、オレの武器の所持を認める。

四つ目、もしもオレが誰かと仲良くなつて、そいつと一緒にいて

も攻撃しない。

五年、中学校は三年間通つて、卒業したら風紀委員は抜ける。

…まあ、こんなぐらいかな

オレは一、二、三、四、五、と指を立てながら話した。

最後のが変だつて？

未来編を覚えてこますか？

『風紀財団』なんてものがあつたでしょ、ひ？

あれは並中風紀委員を母体としてある組織ですよ？

ハイ。『…』ばっかドメンナサイ。

「……」

雲雀は数秒考へている。

オレは風紀委員に入る気なんてないのやーー。

こんだけ条件を付けねば諦めて

「いいよ」

「いいのかよー!?」

くれなかつた。

「じゃあ、『これだけ条件を付けねば諦める』とでも思つたんでしょ。

残念ながらやつまいかなこと

「…………」

オレの悲鳴が朝早い校舎に響いた。

「うわー。早くサインしてくれる?..」

「へへ…なんでこんな条件つけ今までオレを風紀委員にさせたいんだよ…」

サインをしながら聞く。

「君は面白うだからね

「それだけかよ…あーもー疲れた」

サインをし終え、ソファーに座る。

ふう、とため息をついた時。

「失礼します！

委員長！新しく風紀委員に入る者がいると聞いたのですが…」

あ 、副委員長の草壁サンだ 。

「本当だよ」

「 ちつですか…。？」の人は？」

そう言い、オレの方を見る草壁さん。

「 今日から風紀委員に入る」とになつちまつました、 風間南ツス

よひしへお願ひしゃーす」

「君、だつたのか…私は風紀委員長の草壁と申します。あの、」

…」

手に持つた紙袋を渡された。

「…！」れ、なんですか…？」

「それは学ランです。風紀委員になつた者には着用してもらつていいのです」

「……それって女でも着なきゃダメっすか…？」

オレの言葉を聞いて、驚いている。

ま、そりだよな…。

私服も全て男モノだし…。

「……女子……？」

「ああ。オレは一応女子ですよ……。それでもダメつか……？」

数秒考える草壁。

そこに雲雀が口を挟む。

「いいんじゃない? 風間南は普段も男子用制服着てるからね」

「オマエは黙れよー!」

「あ、それなりにじつへお願いします」

くそつ… 雲雀が口を挟まなければオレは今まで通りでよかつたのに…。

「腕章は委員長が持っていますので受け取ってください。」

それでは、失礼しました」

それだけ言い残し、草壁副委員長は応接室を出て行つた。

ああ、そうだ…。

腕章もあんのか…。

「腕章つて付けなきやダ「ダメだよ。付けないと言ひのなら、僕が今すぐ咬み殺してあげるよ」」

即答

!!!

「じゃ、じゃあさーーせめて学ランの着方はオレの自由にさせてーー。せうしふれたらちゃんと付けるからーー。」

「ハア……どの道腕章は付けねばね、それでいいこな自由にさせたいあげるよ。

その分仕事は増やすナゾね」

「…………」

「変更は認めなこよ。ほり、腕章」

雲雀は腕章を持ってきて、机の上に置かれていた腕章の上に置いた。

「ついーす……じゃあ帰る……」

オレは学ランと腕章とこの拷問的なモノを持って家に帰らつとした。

「ねえ、君つて何か武器持つてるの?」

「…ハイ？」

突然悪魔…もはや大魔王様がオレに聞いてきた。

「せっしきの条件で『武器の所持を認めろ』って言つたでしょ。どんな武器なのかと思つてね」

あ あれか。

「今ンとこは何も。だけど『刀』にしようかな、ってのはあるが…。
それでも？」

「うん。どんなものなの？」

「短剣。あ、ただ一刀じゃなく二刀な」

今十雅に作りせてるんだ！」

もう何十回かダメ出ししたけど……。

「ふーん。まあいいや

…まあいいなら聞くなよーー！

「じゃ、オレ帰るわ。じゃーなー

」ついでオレは応接室を後にした

。

そして次の日。

オレは遅刻確定…もう一〇時なのにも関わらず、ゆっくりと学校に向かって歩いていた。

……昨日ムリヤリ渡された学ランを着て、腕章をつけてなー！

でも普通の着方はしてないぜ？

Yシャツの中に紫色のTシャツを着ているからな。

顔を真っ青にして……。

ガララララ。

教室のドアを開けた。

皆、静かにオレを……いや、オレの腕章を見ていた。

「君ーー！遅刻してくると……は……」

教師がオレを見て、怒鳴つたかと思ひきや、震え始めた。

そうだよな…。

学ラン着て、腕章付けてたらそ'つなるよな…。

「何か用スか？」

オレは教師に聞いた。

「なななな何でもないですっつーーーいつ、今テストをして
いるのですが、どうですか？

あーー！嫌ならいいんですけどーーー！」

プルプルと手を震わせながらプリントを渡してくれる。

まあ、暇だし…。

中一の問題なんてオレには問題でゅうねエし…。

「別にいーつスよ…」

オレはプリントを貰いつ

『ありがと「jゼロこますーーー』とか聞いじえのが、気にしない、気にしないこと…。

オレは席に着き、プリントを見る。

理科：か…。

オレはスラスラと書も、一分弱で終わらせた。

それを教師が見ると、

「回収します！！」

と言つた。

「先生！まだ10分しか経つてないのですが…」

「20分つて言つてたじやないですかー！」

とか、いろいろ聞こえる。

「か…風間さんが終わつてしまつたんだ！！！一番後ろの席の人！！！早くしなさい！！

その列は後ろから一一番田の人！！！」

と言つて指をさすのはオレの列。

オレがいるからねえ……。

先ほど文句言つていた声は一瞬で消えていた。

プリントを回収し終えた教師は

「本日は根津先生の代わりなので、説明の仕方が少々変わるかもし
れませんが許してください」

と言つ。

…どんだけ怯えてんダヨ。

本来なら根津の奴が理科の担当なのか…。

そーだ！テスト返却の時、根津をハメてやるつ

でも、ヒマだな。

…よしー

ガタツ。

オレは席を立つた。

「…? 風間さん! ? ビックリしましたか! ?」

「ヒマだから応接室行きました。そんじや

オレはそのまま応接室に向かって行った。

教室に残された教師と生徒達は南の出で行つたドアを茫然と見ていた。

Episode 7 大空と少し仲良くなり、イエローに会つ。

「今日も遅刻、朝ゆっくりできぬつてサイコーだなー。」

昨日に引き続き、またも余裕で遅刻している風間南だ！

今の時間ー？

11時になるな、もうすぐ。

でも気にしない、気にしない

風紀委員として遅刻が許され、超自由人となつた南はあり得ない時間でもゆっくりと、一瞬たりとも焦らずに学校に行くのでした。

心
接
室。

「ねえ……こくらなんでも初日からあり得ない時間で登校しないでくれる?」

「え……。こーじゃん別に……」

オレは学校に着いて、教室で授業受ける気にもならなかつたので、そのまま応接室にGO-したのです。

「それに君は授業もサボつてゐるの? 今日一度でも教室に行つた?」

「いん。や。今学校に来たばかりだけど?」

「じゃあ君は教室で授業受けきなよ。それとも、書類整理をさうかい?」

「…なにその究極の一択!…それなら教室行つてへるよ…。」

「じゃーな!」

オレは嫌々教室に行つた。

「ん？ すぐに書類整理をやらされなかつただけで十分か…」

ガラッ！！

「　　」…………「　　」

おー・今日は教師までも静かだ。

…アレ?なんか席順おかしくない?

「かかかかかか風間さん!…あなたの席はえてないのであや」です!!

よひしこでしょ「つか!…?」

「…えてなこつてやうこひ」とだ

「ハイイイイイイ!…!

実は、効率よく授業を進めるために、この時間だけ席替えをして
もらつたんです!…」

「あー…わかつた」

効率よく、か…ただ単にバカが後ろに来るよ’つにしただけじゃん。

オレに席の隣は、沢田綱吉…。

確かにバカだけどさ…。

ハア…ここで原作キャラと関わるのか…?

あんま原作変えたくないし、メンディイし…。

「ふ…ふいしくお願こします…風聞さん…」

沢田がオレに話しかけてきた。

…沢田ってこんなに度胸ある奴だつたんだな…。

「……ああ……」

オレがそれだけ言つと、周囲で

「おこー! シナが風間さんと話してたるべーーー!」

「やつば最近シナつてすがーな……」

とかこいひこひつてこむ。

授業は

数学か……。

オレ、どの教科でも満点取れる自信あるけど、数学は特に得意なんだぜ?..

そして、オレは教科書を開いた。

沢田はきっと、『風間さんも勉強するんだ…教科書になんか書いてあるかな』とでも思つたんだろう。

沢田がオレの教科書を覗き込んできた。

「なー? 何これ
! ! ! ! ? ? ! ?」

沢田がいきなり叫んだ。

正直言つて、ウルサ過激。

ボクはうれたいんですけどと思つ。

「……何か用?」

オレが低い声で言い、冷たい視線をぶつけて言った。

ああ、微量だが殺氣も混ぜてるぜ？

周りからは

「ツナ…殺されるんじゃねエか？」

「（）愁傷様」

とか言われてる。

「えー…？？あ…あの…」

とモーモーモーモー言いつて聞こえない。

「ハツキリ言え」

この一言で周りがこわいと言っていた声も一瞬で消えました。

「えっと…その教科書、オレ達のと少し違うなって思つて…よくわ
かんない」とばかり書いてあるから…」

「あー、これは数学の教科書。

ただ、トップ校に通つ高校三年でよひやく解けるよつになむ位のレベルのな

「あ……ははは……そりなんだ……。」

「まあ……でも」こんなのが簡単すげーつまんねHとか。沢田解いてみるか?」

「んへーいなら沢田でも解けんじゃね？」

簡単だし。

「イヤイヤイヤイヤ、いいですーー！オレはギーやつたつて解けない

だらりしーーー！」

「あつそ」

オレはまた寝始めた。

それからオレを起さないよ、静かに授業が再開されたらしい。

キーングーランカーンゴーン。

「…昼飯…か…」

どうやら席替えタイムも終わつたらしく、元通りの席になつていた。

購買で飯買つか…。

オレはそう思い、席を立つとしたその時。

「あ、あのーー風間さんーー。」

オレを沢田が呼びとめた。

「……なんだよ…」

オレは今、腹減った＆寝起き、といつ不機嫌な状態なのによー。

喧嘩売つてんのかあー？？

「オ…オレに、勉強教えてください…。」

頭を深く下げるで頼んできた。

「…理由」

「は、はい？」

「オレに勉強教えてもらいたい、つづー理由は…。」

「オレ…今家庭教師がいるんですけど、その家庭教師が答え間違え
る」とにオレに攻撃してきて…。

「それで、あんなに難しそうな問題が簡単すぎ、なんて言つて…」
聞さんに教えてもらえないかなって思つて…」

「（やりやあ、リボーンはイヤだらつた…）

…よーするに、オレにその家庭教師の代わりをやれつー」とか
…。

……まあ、いーザ…」

やつ思つたのも何となくなんだけどなー。

主人公である沢田^{ハヤシ}がどんなくらい頭いいのか…それを知りたかつただけだからな。

オレが言つと、沢田は顔を上げた。

「ほ、本当ですかー？」

「ありがとう」ゼコま「ただし、一回だけな」…そつそれでもいいです！

あつがとひざれこまかーー！」

沢田はまたオレに頭を下げた。

「」でもたメンディー」とになる…。

「「「「風間さん……私にも教えてください……」「」「」「

クラスのほぼ全員が言つてきただ。

「…イヤだ。オレは一人だけにする。一番最初に言つてきただ。沢田の

他の奴に教える氣はない」

皆、嫉妬してゐるよ。

「」

「沢田一、今日の放課後オマエん家行くからな。場所は雲雀に聞くから。

んじゃーな

オレはもう授業を受ける気が完璧に失せたので、カバンを持って応接室に行つた。

もちろん、購買に寄つてからな

放課後。

オレは約束通り沢田の家に来た。

…まあ、時間がもう遅いけど…口が見えず、暗くなってるな…。

家の場所は雲雀に聞いて借りを作りたくなかつたから校長に聞いた。

…答えるの、早かつた…。

腕章見たとたん、敬語使いまくりだった。

ピーンポーン。

「おじやましまーす

インターフォン鳴りして、すぐーーと思つたヤツもいるだろ。」

ま、オレは教えてやる立場だからいいんだよ。

「あら? どなた?」

エプロンを付けた女の人が出でてきた。

「風間南といいます。沢田…沢田綱吉に勉強教えに来たんスけど…いますか?」

「ありー! カッコいい男の子ねー! ツナのお友達ー? 「友達では無いです

? そりなの?」

つか沢田の母親にも男だと思われるって…。

そんなに男っぽいか? オレ…。

「はい、そーです。んで沢田綱吉はいますか?」

「ちよっと待つてね。シナーナー! お姫さんよーーーー!」

階段の上に向かって叫ぶ。

「あ、うんーー!」

ドダダダダダ、と階段を下りてくる。

「風間さんーー！来ててくれてありがとうござりますーー。」

沢田の私服…。

超フツーだな。

つてか服に『27』って書いてあるし…。

そんなに自分の名前好きなんだ…。

マグロなのに…。

「べつに。んで、なんの教科？」

「え？と…ほんとは全部教えてもらいたいんですけど、数学…で」

「数学なん…じやあ早く終わらせて」

靴を脱ぎ、階段を上がる。

部屋も至って普通だな。

床に座つて、一枚のプリントを渡す。

すみじ沢田は一瞬で真つ青な顔になつた。

「あ…あのー。これをやるんですか…？」

「何言つてんだ。当然だろ？」

「…少ししかわかんないんですけど…」

「それなら分かる問題だけでも解け。全くわかんないような問題も少し考えてみる」

「（）の人、下手したらリボーンよりもスバルタだ……！」

は、ハイ…」

「じゃあスタート」

「ひつて、オレと沢田のお勉強会が開催しましたとさ。

それから数分。

「も、もう分かんないです……」

「見してみる……………一問もできない……バカにもほど
があんだろ……」

そう、一問もできくなかった。

簡単なのになー。

「……」れつて何年生対象の問題ですか？」

「並中生なら……高校一年？」

「そ、そんなのオレが解けるわけないじゃないですか！――！」

「黙れ」

オレの一言で静まった。

ほんとにコイツは騒がしい……。

ガチャ。

扉が開いて、誰かが入ってきた。

「ちやおっス」

リボーンだ。

「リ、リボーン！…入ってきたらダメだつて言つたじゃないか！」

「うるせーぞ、ツナ。…で、オマエは誰だ？」

オレの方を見て聞いてきた。

「人の名を知りたいのなら、まず自分が名乗りな」

「……オレはリボーンだ」

「リボーン、ね。オレは風間南。最近沢田のクラスに転校してきた
一般人だ」

「やつぱりオマエが風間か…。だが一般人なわけねーだろ」

「はい？ オレが一般人じゃないと？」

「そんなことは無い。」

「オレは一般人だ。」

「でも反論するのも面倒だから、まあいいか。」

「つかオレのこと知つてんなら聞いてくんじゃねーよ。」

「そー思いたいなら思つとけ。で、何の用だ」

「特に用はねーぞ」

「リボーン……早く戻ってくれよ。」

「おめーは黙つとけ」

「んな……」

…「Jのガキ……殺氣放つてやがるな……。

警戒してんのか……。

まあ無理はないだろ「ひかじや。」

第一オレも少し殺氣放つてやー。

お互に様つて「J」とで

「… なあ沢田」

「は、はい…？」

「オレもつめんどくさくなつてきたから帰るな」

「え… あ、はい… あ、ありがと「アゼ」こました…」

「チビちゃんもじやーな」

オレがリボーンに言つて、やうに大きな殺氣を放つてきやがつた。

つたく… ムカつくガキだ。

「チビちゃん、なんて呼ぶんじやねえ」

「呼び方一つで文句言ひつな。チビウチやん」

「チッ……」

舌打ちとかムカつくー。

オレはそのまま沢田家を後にした。

「リ、リボーン……？」

南がいなくなつた沢田の部屋では、リボーンが難しそうな顔をして

いた。

「……アイツ……何者なんだ……？」

「な、何者つて……？」

「アイツはオレが最初この部屋に入ってきた時からずっと、殺氣を放つていやがったんだ。

オレが放つてた殺氣にも動じない……。

おまけにこないだ学校帰りをつけたが、気配が突然消えて見失つちました。

「このオレを撒いたんだ……ただモンじゃねえ……」

「おー……何やつてるんだよ……風間さんを尾行するなんて……」

リボーンの暴露話に鋭くツッコミを入れる沢田。

「……何より、アイツのことを調べてもなかなかヒットしねえ……情報

が無いんだ…。ボンバーの力を以てしても…な

「？それって戸籍こせきが無いってこと？」

「いや、ナウじゃねえ…あることはあるが、情報が少なすぎるんだ…」

「……………」

沢田の質問にしばりく答えるリボーン。

「（シナに言ひて、風間に警戒心を持たれても困るしな…）

何でもねえぞ。今の話は忘れとけ

「じゃあ最初から話すなよ…」

「それはともかく、そろそろ飯の時間だぞ」

リボーンは部屋を出て、階段を降り出した。

沢田は疑問を残したまま、一飯を食べたのであつた。

Episode 8 大空VS嵐！

「あーあ、昨日は沢田のせいで疲れた」

ハア、とため息を吐きながら南は登校していた。

時刻は9時。

普通は遅いと思うが、南にとつては早い時間。

昨日、雲雀から連絡があつたからだ。

1-Aに転入生が来る、と。

ちなみに一人来るらしい。

南は原作知識で知っている中で、獄寺が転校してくることを知っている。

その転入生が獄寺だと思い、学校に早く行くことにしたのだ。

もう一人が誰なのかは知らないが…。

ガラッ。

「おはよ〜♪ やあこまつー 風間さん！」

今日は一時間田はH.Rで、転校生の紹介をしていました！

やはり、キビキビと南に説明する教師。

「（来たか…） 転校生？」

「はい、獄寺！山下！風間さんに自己紹介しろー！」

南は教師が言った『山下』といつ人物に驚く。

原作知識はあるが、転校してくるのも曖昧だからである。
あいまい

ちよつと出でてくるHAPPYキャラだと判断し、とつあえず見てみる」と
にした。

そして、山下と呼ばれた女が立った。

獄寺は座つたままだ。

「山下咲といいます。風間さん、よろしくお願ひします」「うるせえ、
話しかけんな」…すつスミマセン…」

「…………（怖ええええええええええ…………）」「…………」

南は、咲の声を聞いた途端、『いじつ、かわいいームリ……絶対にこ
んな奴は原作にいなかつた……』と語り、殺氣をぶつけた。

「『』、獄寺君……早く血口紹介をしなさい。」

教師は『南の気分をこれ以上悪くさせたまるか!』と思つて獄寺に言つ。

「あー、オレもメンヘラんでいいや。後で雲雀に聞くしな」

獄寺は絶対自己紹介なんてしないから時間のムダだとこいつとを南はわかつていた。

それよりも、山下といふ女の存在が気になつた。

原作にいなかつた人物がいる、このことを説明する方法が一つしか見当たらなかつた。

南と回じ、『転生者』である。

といふえす十雅とお話をうながして、南は席に座つた。

あれから、オレは十雅に会いに行き、聞いた。

「お、南！」

「十雅…あの女は何だ」

「あの女？」

十雅も知らないのか…？

「オレのクラス…1-Aに転入してきた奴だ。獄寺と一緒にな…」

「んー？ 獄寺と一緒に転入していく奴なんていねーぞ？」

「だから聞いてんだる…」

「あ、そつか

やつぱまコマイツ馬鹿だな…。

十雅はどうからか資料を取り出した。

「んー、やつぱそんな奴はいねーな…。転生者かもしんねえと思つたが…記録がない」

パラパラと資料を見ながら話す。

「記録？」

「ああ。転生させたら記録をつけるんだ。これも仕事だからな。
ま、転生せるのは間違えて殺した時だけだからあんま使わない
けど……。

南の前にも転生させた奴いるんだぜ？同じリボーンの世界にな

「へー……。いつ頃？」

「それは教えられない。ま、その内分かるわ」

「その内……？」

「ま、いつか……。」

「で、その女の名前は何ていうんだ？」

十雅は資料を閉じ、聞いてきた。

「えつと……『おまかせ』『止マ』。名前は忘れた……つか知らね」

「『止マ』、ね……。とりあえず調べてみる」

「おれ、なるべく卑くな

南がそいつと、十雅は何かを思って出したよ」「あ」と囁つた。

「何？」

「あのよ……前に小型ノートパソコン……『おまかせ』から『パソコン』でいいか。ともかくそれ送つただろ？」

あれに特殊能力つけんの忘れてて、今は単なるパソコンなんだけ
ど……

「……能力つけてオマエが考えてつけれるのか？」

「ん？まあそつだな……」

それを聞いて、南はあることを思いついた。

「んじゃ、オレが能力考える」

「あ、いいぜ…………ってダメ……」これはオレが考えるものなん
だからよー」

「男に」「言は?」

「無し………じゃなくてええええ…………」

「よし、じゃあオレが考えるから。だから今はまだ何もつけないで
おけよ。じゃーなー」

南は勝手に狭間から現実世界に戻り、そこには自分の発言を後悔す
る十雅のみが残された。

そして、今この現実上

◦

「オレを裏切るのか？リボーン！今までのは全部ウソだったのか
やーー？」

「ちがうわ。戦えって言つてんだ」

「はー？」

南は獄寺と沢田の戦いを見るために屋上に来ていた。

なぜ南が戦いのこと知つていたか。

それは戦い後の獄寺の変化っぴが面白かったから覚えていたのだ。

「あー早く死ぬ気になんないと死んじゃうわー」

そつ思つていひる間にも、獄寺から沢田への一方的な戦いが続く。

「^{リボーン}
復活！……死ぬ氣で消防活動！……」

バカ、と音を出して沢田の死ぬ氣タイムが始まる。

「そーいや死ぬ氣見るの初めてだつたな……」

南は屋上でボソッと呟いた。

「消す消す消す消す消す……」

沢田の手がダイナマイトの火を消していく。

獄寺は『一倍ボム』を放つが沢田はどんどん火を消す。

そして、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成のために手から一
つダイナマイトが落ちる。

こういう場合、一つ落ちるとバランスが崩れるのでダイナマイトは
ポロポロと落ちていく。

「（ジ・ヒンド・オブ・俺…）」

獄寺がそう思つた途端…。

「消す…！」

『消火活動』を目的として死ぬ気になつた沢田は獄寺の周りに落ち
たダイナマイトの火も消していく。

「……おー、すゞーなー……それ以上にキモイけど。

で、何でオマエがそこにいるんだ……？本来存在しないはずの、
イレギュラーさんよ……」

南がそう呟いた。

南が大っ嫌いの、本来存在しない転校生

山下咲。

彼女が沢田やリボーン達と一緒にいたのだ。

ならば原作と少し変わつて進むのではないか……？

そつ思つて南はかなりイラついていた。

しかし、原作通りに物語は進む。

獄寺が沢田に土下座する。

しかし、Iの後が変わった。

「とにかく、10代。Iの女は誰ですか？さつきから一緒にいましたが…」

「…チッ。Iからあの女が関わるのかよ…獄寺、気がつかなくてよかつたのに…」

南の予想は、当たってしまった。

「あ、この子は山下咲ちゃん…です。今日獄寺君と一緒に転校してきたんですけど…」

なぜか敬語になる沢田。

「エト、オマエはー0代目の何だ……さつきから馴れ馴れしくー0代目の傍にいやがつて…！」

「（ナイス獄寺あああああああー…………ウザいよな！超ナイス！…………！）

南は心の中で獄寺を後押しした。

「えっと……ソナの友達……です。今日なったばかりだけど…」

咲がビクビクしながら囁つ。

そして、それだけではない。

顔が真っ赤に染まっていた。

「アイツ、転生者つーことは原作のことも知つてんだよな…。なら何で怯えてるんだか。

「そんでもつてあの顔は何だ。醜い顔に拍車が掛かつてんぞ」

南は離れていてあまり分からぬが、獄寺は咲にかなりの殺氣を送つてゐるのだ。

知つていても、まさか会つてすぐに殺氣をぶつけられて怯えない人は一般人にはいないだろう。

そして咲は獄寺のことが好きなのだ。

教室でもチラチラ獄寺を見ていた。

「ケツ」

獄寺は咲の存在を自分の中から消した。

そして原作に戻つて、不良達が来て、獄寺がダイナマイトでボコボコにした。

「あー、よかつた。原作のこと覚えちゃいないが、アイツが獄寺から嫌われて、

「どっちかっこーとラッキーだったからいや」

少し上機嫌になつた南は iPod touch で曲を聴きながら家へと帰つた。

Episode 9 教師をハメる！

昨日、明日は理科のテストの返却があると聞いた。

つまづ、根津をハメる日だ！

そして…。

今日は、学ランも腕章も付けてないんだぜ！—

…でも、今日はなんだよな…。

今日からじやないんだよな…。

なんで付けてないのかって？

フツフツフ…。

これこそがあの恥まわしき根津をハメる方法だ！

だから昨日頑張って雲雀から許可を得たんだよ…。

アイツ、人の言つてることムシしゃがるから大変だったんだぜ？

昨日にさかのぼってみよう

。

「なあ、明日だけでもいいから一般の生徒と同じ制服で来て『ダメ』

」

…聞きました！？

」の即答つぶり……

「なんでそんなに即答なんだよーー。」

「君は風紀委員でしょ。なら当然だよ」

「だからーー、一日だけ……明日だけでいいからーー。」

頼むよ、極悪非道の風紀委員長雲雀様

「咬み殺してあげようか？」

死にたくないけど、明日の普通の制服はなんとしても取る！

11

「あ、それは丁重にお断り。ホントに頼むつて……」

「...」(Δシ)

「うーん、見てムシとかなんだよ……。」

「……」(アシ)

「ちよ、ちよつと酔くね？」

「.....」(Δシ)

「そーかよー！ムシかよー！ならオレはここで頼み続けるだけだ！」

なあ……明日…」

と、二・三時間続き雲雀が折れたのだ。

……オマケに大量の書類（今日来る分だけらしいから大量かは分からぬいけど、きっと大量）も。

よし、逃げよ

今思つたけどオレって、一回も風紀委員の仕事してないなー（逃走するから）。

肩書きだけでいいって。

風紀委員とか、『風紀』って掲げただけの不良の集団なだけなんだよな～。

原作では一部しかその様子が書かれてなかつたから違つと思つだらうけれどな。

おつと、これを雲雀に賣つては宣傳売るのと同じことだから言わねえけど。

ま、そーゆーワケで今日のオレは風紀委員と知らないヤツは一般生徒だと思つだわつ。

根津とか根津とか根津とか。

あー、根津の驚いた顔が目に浮かぶぜ

楽しみだな～

「今日は理科のテストを返却する。呼ばれたヤツは取りに来い。

そして、理科の時間

。

まず、青山一

そして、名前順で呼んでいく。

オレは風間だから、沢田より前かー。

「大久保一」

「はい」

「風間一」

「……」

「風間一早く取りに来いーー！」

ムシしてる訳ではありません。

爆睡中です。

周りの生徒（風紀委員と知っている生徒）は

「根津のヤツ、風間さんの機嫌を悪くせんないよー。」

「根津… セヨウナリ

…とまあ、オレが根津をボコると毎回こりみつだ。

オレとしてまだ考へ中だな。

「風間あ……起きんか……」

そう言いながら根津は教科書を丸めたもので殴りつとする。

オレは爆睡中だったが、気配を感じて起きた。

ヒュウ。

パシッ。

なにが起きたかと言つと、根津が思いつきり殴ひつしてきた（ヒュウ）。

そこでオレの右手だけが動いてそれを止めた（パシッ）。

んまあ、こんな感じ？

「貴様つ！—」

「ウルセエ。黙りな」

根津のやつ、どんぐり顔が真っ赤になつてへや。

あー、楽しい

「生徒！」とせが生意氣なんだ！！

…そ、うだ、オマエのテストの点数を皆の前に宣ふりこむやつ。

えーっと…100点だ…！

たかが100で…なにいい…？？？？…満点…？！？

?…！

「まあ、簡単過ぎて一瞬で終わったしー？」

オレを誰だと誤つてんの？」

「ぐつ…まあいい。そ、うだ、コレで仮定を話してやる。

理科のテストで満点を取りながらも返却時は寝てるやつがいると
しよう。

そいつは間違いなく頭のいいやつのテストをカணニングしている…

それはなぜか…なぜなら…。

そいつは頭がいいようと思わせたいからだあ…………

「…（バカじゃないのか？根津のやつ…。風間さんはホントに頭いいんだよ）」「…」「…」

クラス中があり得ないほど静かになり、皆の心の声が一緒になった。

「そー思いたいなら思つとけ。五流大卒の根津銅八郎」

「…なぜ…まあいい。後で聞いてやる。

続きだ！川田

お？案外動搖しなかつたな？

まあこじでコアクションしちまつと退職すつからな…。

ああ、オレが根津の学歴を知つてるのは調べたからだ。

転入一田田で根津と会つた時にかなりムカついたからさ

後はこいつそり雲雀にバレないよつに調べたんだ！

雲雀にバレたら根津をハメられないじゃん？

あー…そうだ…こいつムカつくから退職させよ

そんな真っ黒いことを考へてゐる内に話は進んでいき、沢田が呼ば
れ、仮定をし、獄寺が来て…。

「何を言つてゐるんですか校長。そんものは嫌に決まつていますでし
よ」

「わわわわわ君は雲雀君を敵に回したいのかー?」

「校長……! けません!! 風間が一番悪い生徒なんですよ……」

「根津君、まずは風間さんを帰らしていいかね?」

校長はオレが風紀委員と知つていて

今は校長室。

「風間さんは風紀委員だ……」

「…………？」

あー、珍らしく、珍らしく

「はー、やつこ『えばー・A』に風紀委員がいるとか……。

風間さん……あなたを許してくださ……。」

お 、見事なド・ゲ・ザ

でもな、オレってばわざのがかなり頭に来てんだ

「じょうがないですね~。

実は根津が五流大卒で、40年前に並中に通つてたつてことを教

えるだけでカンベンしてやるよ」

「…? 風間さん! それは本当のことなんですか! ?」

おっ、いーねーいーねー

校長が食いついてきた。

「まー後は本人に聞いてくださいーー。」

そんじゅ

オレは校長室を出て行つた。

後から聞いたことだが、あの後は根津が退職することになり、沢田と獄寺も何事もなく助かつたそうだ。

そんでもって、オレは見事に書類からの逃走を成功させました

Episode 010 ハミニーに勧誘されるー

あつとこつ間に7月... もうすぐ夏休みだ。

今日は... 6日。

そうそう、いつの間にか沢田と日本が仲良くなつてたんだぜー！

何があつたんだるーなー。オレこの辺の話覚えてねーんだよ...。

ま、別にいいか。

別によくないのは、今の状況だ。

場所？並中。

まあこれは問題ない。

一緒にいる人？

…これが問題ある。

沢田、リボーン、獄寺、山本、あの女。

原作でもじし、こんなシーンがあったのならば許さう。

だがな、なぜあの女がいるんだ。

全く……。

「おこ、チビちゃん。オレを呼んだ理由はなんだ」

「オマエ、フマコローに入れ」

……はい？

「聞こえてなかつたのか？ボンゴレフマコローに勧誘してね」
ことだべ

「断る」

「…なぜだ」

あのさ…まず一般人に『マフィアにさせあげる』と喜ぶ人がいるとも?

「オレのリボーンは常識が無いのかな？」
チビちゃん

「オレはマフィアになるつもりねーし。第一束縛されたり制限されるの嫌いだし?」

「オレは自由がいいからなー」

「安心しin。ボン!オレは束縛なんかされねー自由なマフィアだぞ」

…オレが言いたいこと伝わってねーし…。

「…やうだとしても断る。理由はねーがな」

「……そりが。わかつたぞ。だが気分が変わればこいつでも入れてや
るべし」

あり?案外モノ分かりがいいな。

予想ではこの後もしつこく誘つてくると思つたの。たぶん。

…まあ、いつか。

「おこ風間。リボーンさんの勧誘を断るたあびーゅーんどだ」

「…………」Jの声、数回しか聞いたことないから無視でいいかなー。

でもなー、ハイシとは気が合ひついでだよなー。

あの女のことが嫌いなの一緒にし？

だから一応返事しどくか。

「別にいーじやねーか、オレの自由で」

「良かねーよ！内容も内容だ！ボンゴレに入るのを断るだと？ナメてんじやねー」

「いや別に…ナメてなんかねーし……」

「イツ、話通じねー……。

「まーまー獄寺落ち着けつて」

「テメエは黙つとけ野球バカ！風間！…リボーンさんが勧誘していくさつてんだから入りやがれ！」

「だから、嫌だつたの…」

しつこいな。

だがここで、救いなのか逆なのか、一つの放送が入った。

『風間南さん、至急応接室に来てください。委員長がお待ちです』

……草壁さん……。

……ま、仕方ない……行くか。

「つーわけでオレ行くわ。んじゃな

「テメつーおい！」

獄寺が叫んでる氣がするが、氣のせいだね！

でもなー、今後の心接室に行くのも嫌だなー。

帰る……ヒョウが家まで咬み殺して来やつだからなー。

……しゃーねえ、行くか。

渋々応接室に向かった。

ガララッ。

「んで、何の用？」

開けながら、室内にいるあわつ雪雀に聞いた。

「いい加減、仕事をしてもうひどいと黙ってね」

「……お疲れ様でしたー」

回れ右ー…あ帰らつー…

ヒヨッ。

「逃がさないよ」

……ニヤ、ソシフターで脇殴りつらぬく。

ギコギコド避けたがりニニキの、逃げたりした。

「おこ、逃げたら頭割れるだろ。」

「相なり避けと申つたかひな」

「……なんつートキテーな根拠…」

「……その葉、相にだけは言われたくないな

「何やれ、ヒヅヘヌヽヽ、傷付かないけど

ああ、いつ余話じてゐる最中もソシフターで攻撃しそうとしかれてゐ

んだぜ？

風紀乱している委員長だよな、こいつや。

「…で、仕事するの？」

突然攻撃を止めて聞いてきた。

「いや、しねえ」

何の悪びれもなく返事をしたからかなあ？

またトンファーが来たんだよね。

「……せひまほせせ、咬み殺す……」

ビコシ。

「のわつー危ねーなーー」

仕方ねえ、逃げるか。

「逃がせないよ

わー、追いかけてきた……。

校舎だと階段疲れるから…。

よし、外行こう！

ドタドタと階段を降り、あつという間にグラウンド。

…あれ？何だろ？…。

ドガアン、つて大きな爆発…。

あ、誰か見える。

獄寺、リボーン、階段のところ……10年後のランボ？

あ、爆煙の中からも出てきた。

沢田に、山本……それにあの女か。

あー、嫌なモン見ちまつたー。

「見つけたよ」

。 . .

そろそろと、後ろを見る。

「あは、ははは……？… やあ、こんだけ

「君に選ばせてあげるよ。このまま素直に仕事するか、僕に咬み殺されるか」

「なんじゃそり……。あ、じゃあ、こないだ根津銅八郎の学歴詐称を見抜いたからそれでキャラで！」

いやあ、あのことが役立つとはな。

オレがそう思つてゐると、雲雀が大きくため息を吐いた。

「…何だよ

「仕方ないね…今日は許してあげるよ「やった!」でも、明日は仕事あるからね

……。

ん?何か聞こえた?

オレには聞こえなかつたなあ。

「そんじやなー!」

オレはもう何も言われたくないから校門までダッシュした。

「ハア……どうせ明日も来ないだろうから、放送しないとね……」

南の自由っぷりに疲れた雲雀は、足早に応接室に戻った。

今、オレは飛行機に乗っている。

理由？

十雅からさ、パスポートとか貰ったから。

で、せつかくなライタリアがいいなー、って。

ん？ それだけだけど？

オレは思ったことすぐ実行するからな。

ああ、今日は平日だから学校あるぜ？サボってるナゾ。

でさ、イタリア行って、どこ行い？。

ピサの斜塔でも見に行くか？

…いや、冗談。

ボンゴレファミリー本部？

いやいや、もつと有り得ない。

……よし、決めた！

行き当たつぱつたりーー。

おお、こんなことを決めてる間に到着だ。

わへ、ビリに着くかね…。

「うーん、どうか分からぬ森の中。

」「うーん、早速迷子だ……」

イタリア語読めるんだけどさー、道は知らないんだよ。

人が多いの嫌いだから人避けてたら…。

森でした、みたいな。

人嫌いとか…雲雀に感染させられたな。
群嫌い。

「…とりあえず、だ。来た道を戻れば……どっちから来たつけ?」

マズい、これは迷子ではなく、遭難……?

携帯……『圈外』、ね。予想はしてたよ。

「とりあえず、行き当たりばつ当たりって決めたんだから続けよ」

そしてまたもや道無き道を進む。

1時間ほど歩いただるつか。

視界に大きな建物が入った。

…よし、とりあえず入ろう。

さすがに疲れてきた。

ずっと同じ景色って意外とキツいな。

頑張つて走るか。

走ると意外と近く、すぐに着いた。

でも見張りがいるなあ……。

「Ciao...」

疲れきった声で挨拶……。

「…？」

「あ、驚かせたなら悪い……。つい日本語で言つてゐるけど通じてる?」

「…日本人か」

あー良かった…。

イタリア語でもいいんだけどさ、最近使つてないから自信無いし。

「ああ…。空港出て、テキトーに歩いてたらここに着いて…。できれば入らせてもらえね? つつかこじどこ?」

「…ここは一般人が来るような場所では無い」

「つづーと、マフィア?」

「…?」

そんなに反応しちゃダメだね…。

「あ、オレはどっかのファミリーとかじゃなく、普通の奴だから…」

「…………」ジゼボンゴレ独立暗殺部隊、ヴァリアーだ

…時が止まつたとは、正しく今の状況だわ。

確かに、建物にVARIAらしき旗はあった。

それでも来たのがいけないのか？

……最悪だ……。

「おい、どうした？」

「いや、何でも…。やつぱ帰つるわ」

「待て。今から引き返すことはできない。ここに情報を得たのならば他のファミリーにバラす危険性があるからな」

…なら話すな、と思うのはオレだけ…？

「じしじつ。誰そいつ」

「「…」」

突然中から人が出てきた…。

……でもな、見たことある顔。

「ベ、ベルフュゴール様！」

そう、プリンス・ザ・リッパー切り裂き王子の異名を持つ、ベルフュゴールだ。

「で、オマエ誰だよ」

「あ、オレは日本人の風間南つーんだけど…。道に迷つてここに来て…。できれば中に入れてくんね？腹減つて喉渴いた…」

「迷子かよ…。ま、いーゼ。入んな」

もつ逃げるのは諦めた。

だってさ、逃げたら殺されそりじゃん？

今にナイフを投げてきやうだし。

「なあ、オマエ戦闘とかできる?」

「戦闘つか暗殺部隊なら殺し合いだろ?」

「オレらはそーだけど、オマエは一般人だろ? あ、それとも殺し合
いしたい?」

「アホ。オレはそんなことお断りだ」

オレとベルが普通に会話していることに周りにいる奴らが驚いてる

なー。

別に気にしないナビ。

「うへーとは一応強いんだ?」

「あんなー。よく知らん

「なんだそれ」

「こんな」ことを叫ぶと、他の者が出てきた。

「う、お、おーーー誰だやこつまーーー」

「ウルセヒーーー」

ボカツ。

……しまつた……。

出でたロン毛のウルサイ奴を殴っちゃつた……。

「あ……オレの鼓膜を守るための正当防衛だからな！」

「言い訳になつてねえよ」

違つぞベル！

これは言い訳では無いからな！

「テメエ…ぶつ殺されてーか!?」

「だからさ、ウルサいんだけど？」

鮫だろうが何だろうがかかつてきやがれ！

「……で、ベル。コイツは誰だ」

「風間南つづー迷子。日本人だとよ」

迷子つて。
。。

「迷子…？」

「迷子って言われ方は嫌だけど…。 そんで腹減ったから何か貰おつと思つてさ」

オレが付け加えると、納得したようだ。

「でさ、 オマエらの名前は？」

そういうえば聞いてなかつたからな。

オレは知ってるけど、名乗られて無いのに知つてたらおかしいし。

「オレはベルフェヨール。 ベルつて呼べよ」

「オレはスクアーロだあ、」

「ん、よろしくな。ベルにスクアーロ。つつかさ、食堂みたいな場所つてまだ？」

「すぐそこだぜ」

ベルが指した場所には大きな扉。

いい加減に腹がヤバいから勢いよく扉を開け、叫んだ。

「何か飯くれ！！」

「うん、中にいた人たち固まってるよ。

「あ、そこ変な頭の人、何か飯くれ」

頭のてっぺんからだけ緑色の毛が生えてる。ダサ。

「こきなり現れて何言つてるのよ。」

「うわ…しかもオネエ言葉とか…生きる価値無いな」

「黙りなさい。」

あー、コイツいじめるの樂し

「うしお ルッスーリア、何か作つてやれよ

「そーそー。ベルの言つ通りだぜ?早く作れよ

「命令になつてるわよー?」

「早べ」

「キハイ……わかったわよ。」

「ベー、おもしぃ。」

「何でもいいわねー。」

「だから向でまごっこつづけてるだら」

「ホントにムカつく坊や……」

「あ、オレ一応女だぜ。」

「」

… ウオ、三人の声が重なったよ。

ベルとスクアーロ、それと多分ルツスー^リア。

「あ、男だと思ってた？」

「…[冗談]…じゃね^エんだよな…」

「う、お、い……」

「まさか…私と同類?」

「バカ!…ちげーよ!…」

オレがルツスー^リアと同類だと?

ダメたこと言つた。

「どうオマエの名は？」

「私はルッスーリアよん。ルッス姐つて「断る」」

誰がルッス姐だなんて呼ぶか。

「それよかまだ？ルッス」

「……姐はダメなのね……。できたわよ、チャーハン」

まだ熱そーだな……。

でも腹減つたから食お。

「いただきー」

「ムシャムシャ」という効果音が出そうな勢いで食べる。

「ん！ふわいほ！」

「いや、何つてるか分からねーから…」

む。ベルは読解力に欠けるな。

仕方ないなあ。

「クリ、と飲み込んで再び口を開く。

「つまーな

「あんまり。嬉しい」と言つてくられるじゃないーえつと… 前は…」

「ベルに聞け

「……風間南、だとよ

ベル、名前を叫んで疲れた表情するなよ。

「ありがとね、南ちゃん「シネ」なー?」

ルツスが言つた時、オレは殺氣を込めて言い返した。

「 「 「 ……」 」

その殺氣に気づき、三人はオレから距離を取る。

…まあ、普通に警戒するよな、うん。

「テメエ… やはりどつかのフアミリーか！…」

「あースクアーロ、違う違う。オレは名前にちゃん付けされたのが嫌だつただけだ」

「……は？」

いや、三人して同じ顔しなくても…。

バタン！

「今の殺氣は何だい？」

あ、赤ん坊だー。

マーモンか。

「…そこ」にいる南ちや 「あ、あ、？」 …南の殺氣よ。でも敵意は無いから大丈夫よ…

「南…？君のことかい？」

オレの方を向いて聞いてくれる。

「アーダジー？ あ、随もオレのことは呼び捨てでいいからなー」

やつぱりチャーハンを食べるのを再開する。

「 「 「 「（何て自分勝手な奴……）」」」

んー、こいつは…

…あり？ XANXUS 何がワケアリだっけ…？

やの顔見こ、元謀がいくつこ、と反応する。

「んー、じゅあ帰りつかなー。明日もサボると雲雀アイツつひぬかねーだし
なー。そーいえば、ここボスって誰？」

ああ、もうマーモントも内鬱とか、リリヒーの理由とか話したぜ。

「で、南はこいつまでいることのかい？」

「あんじゅ、うひんやせん」

んー…リング戦の最後、読み忘れたんだよなー。

あくしょん…。読み忘れたんだよなー。

「ボスは……」

あ。なんかシリアス…。

「やつぱ別に話さなくていいやー。そろそろ帰らうこと日本に着くの遅くなるし…」

つつかわ、今思つたけどレビューは?

いや別に会いたくないけど……。

「じしづ。それなら空港行く?」

「ん、そーする。…道教えてくんね?」

「道を教えるより送つていく方が早いと、僕は思つよ

「マーモン……送つてくれんのか?」

「金は取るけどね」

…金大好きなんだな、うん。

「や」はセルフサービスでよひへ

「それなら断」よじ行ひつゝ、さあ行ひつゝ……ハア。一回だけだからね

うしー勝つた!

と、まあこんな感じで空港まで送つてもうひつた。

…リムジンでな。

もうお世話にならぬが、やなかつたよ…。

VARIAの皆もオレが荷物無いのに飛行機乗るのに驚く……つか呆れてたし。

別によくね?

ムツツリ…はいいとして暴君様には会いたかったなー。

ま、仕方ないか。

日本に戻つたら見事に疲れて、次の日もサボつたら雲雀に怒られた。

風紀委員に入る時に許可得たのに…。

まあ、雲雀に何を言われようとオレは気にしないけどな。

Episode 11 風と友達になるー

イタリアから帰国し、1日が過ぎた。

今日は休日だー

…雲雀から呼び出しあれてるナビ、オレが行くと思つか?

もうひん、行きませーん

今日は商店街とかで放浪するって決めてんだ!

つーわけで、今は商店街。

商店街には色々な店があるが、オレの行きつけの店になつてゐるアクセサリーショップがある。

文物から男物まである、結構いい感じの店だ。

オレは「」でリング、ペンダント、ピアスを買ったことがある。

もちろん男物だが…。

今日は新商品が入荷した、と連絡があつたから来た。

ああ、店長に連絡先教えてんだよ。

最初はオレのことを怖がっていたが、今では良い舍弟のよ^{しゃ}_{てい}うな存在だ。

ん？それじゃダメか？

大丈夫、オレには何の問題も無いから。

「こりゃこまか…と、風聞れんでしたか。早速こりしていただ
き、誠にありがとうございます」

「よ、店長。で新商品つてどれだ?」

「アーティストの世界」

持ってきたのは、ブレスレット。

黒い紐のような物が何重かになつてているものだ。

うん、なかなかいいな。

「いかがでしょうか?」

「デザインは気に入った。値段は?」

「新商品のため、あまり割引はできなかつたのですが…。今は100円をギリギリ切れるくらいですね」

100円か…。

うん、決めた。

「いいぜ、買ひ。他に新商品あるか？」

「ええ。只今他のお客様が『見になつてこると思つますが…』

「ソイシ、ビリビリのへ。」

「先ほゞまではひらひら…」

そつとられて案内される。

この店、意外と広いんだよな。

それにもしても、このオレよりも先に新商品を見るとせ…。

氣に入らない奴ならぶつ飛ばしてやる。

「あちりのお客様です」

「……アイツ?」

「?.?.はい、そうですが…」

…確かに、アイツはアクセサリー好きだった氣がするけどよ…。

まさかここに遭遇するとほな。

近づき、声を掛ける。

「よ、獄寺」

「…」

バツ、と振り返つてこちらを見る。

「か、風間一何でこんな場所にいやがるー。」

「いや、それはオレの自由だらう。しかもオレはいいの常連だしね。」

「チッ…」

「イイツ…舌打ちしちゃがつた。」

「何で最近……前からだけれど、ソレ毎日サボつてたんだよ」

「ん? イタリア行った。日帰りだから手ぶらでな」

「はー? イタリアに手ぶらで日帰り? ……何して行ったんだよ? ……」

「暇つぶし」

「…………」「…………」

何か変なこと言つたか?

よくあるひる、いじること。

「……いたぐ……オマエのよつな奴がリボーンさんの勧誘断つて向かってんのかと思えば……」

「別にオレの自由だらへ。それこじしてもオマエ、なんか沢田に似てき
たな。色んな意味で」

「オレが10代田に？」

あー、モーいやコイツ、沢田第一主義者だつたな。

なんか面白いし、アイツ嫌いなの同じだから仲良くなつとくか。

「そりやなー、ずっと隣にいりやあ似てくんだら。右腕なら隣にい
るの当然だらひじっ」

「右腕、オマエはオレが10代田の右腕に相応しこと思つかー。」

「だつてよー、山本は違つだら?あの女はウザイからモード論外。
そうすると獄寺が残るしな」

あ…これってつまり、残り者つてことになるな…。

ま、気分が良い今の獄寺は気づかないだろ。

「オマエ…よく分かつてんじゃねーか！」

「ほりな、せっぱつ。

頭脳は良い方だと思ひのこ、アホなんだよ、コイツ。

「…なんか嬉しそーだな…」

「オレは10代田の右腕として一生10代田に仕えると、今改めて
決心した！」

…あつそ。

なんかマイシと会話すんのメンズくなつてきた。帰る。

「あいつ、わざわざおもつだな」

アリスは100円札を渡す。

「はー、うれしいですね。ありがとうございます。お釣りの方が……」

「あ、釣りはいらん。小銭邪魔だし」

小銭つて邪魔じゃね?

最近いつも思うんだがさ。

「では募金箱の方に入れさせていただきます。いかがお品物になり
ます」

「ん。あ、獄寺。アドレス教えてくれよ」

「ああ」

「ピピッ、と赤外線通信をする。

「あー、オレのことは呼び捨てでいいから

「んじゃあオレも隼人でいいぜ」

「んー、わかった。そんじゃな、隼人」

そして店を出た。

この世界に来て、友達が一人…ん？雲雀もか…？

……雲雀も含めたらこれで三人目。

……前世よりも多いな。

なんか久しぶりに風と遊びたくなつてきたな…。

もうすぐ夏休みだし、誘つてみるか。

そう思いながら家に帰った。

Episode 012 問7を解く！

あつとこつ間に夏休み！

…なのに、今は学校…それも応接室にいる…。

ハア…まあ朝早くはないから少しあはマシだな…。少しは。

「ねえ、聞いてる?」

雲雀コバヤシにしては、だがな。

「見回りだるー？ヤ・ダー！」

ギロリ。

「うわお！」

雲雀サンが睨みつけてきたよー。

「咬み殺されたい？」

「結構でーす」

「やつぱり君は人をイラつかせるのが上手だね」

やべえ…。

結構…キレイだ〜。

よし、とつあえず話題を変えよう。

「そーいえばよ、何で風紀委員が応接室使えてんだ？まだ委員会で部屋は持てないだろ」

「…僕が言つたんだよ、ちよつて君が転入していくのに会わせてね

「なぜオレが来る時と一緒に…」

「君は楽しめそうだったからね。僕が特定の場所にいて、いつでも君を呼び出して咬み殺せるようにしておきたかったんだ。

それに、元から次の委員長会議でそつするつもりだったから

…「ワー、サスガ！ワガマママイインチヨウ！」

「で、仕事してね」

「ふざけんな。全力で拒否する」

あ…しました。

つい思つたまま僵つちました…。

うん、殺氣が溢れてるね

「オレ、なんか嫌な予感するから帰る…んじゃなー。」

「待ちなよ…ハア。相変わらず逃げ足速いね」

オレは世界新記録を超えるよしの速さで逃げた。

つてか、こんな暑い日に見回りなんてことは絶対にしたくない…!
(注: 南は一回も風紀委員の仕事をしてません。)

プルルルルルルル…。

「電話…？隼人じゃん」

隼人からの初電話だな。

「もしもしー？どした？」

『10代目に聞いたんだけどよ、頭良いって本当か？』

「まーな。んで、それが何？」

『ちょっと…分かんねえ問題があつてよ…。今から10代目の家来
れるか？』

す…素直…!!

分かんないってハツキリ言つた…！

「おう…すぐ行く…じゃ、後で『あのよ…ん？何？』

少しの間を空けて、隼人は小声で再び話した。

『…今、アイツもいる…。オマエが嫌なのはよく分かるんだけどよ…しそつちゅうオレのこと見てきてウゼエし、できるだけ早く来れねえか?』

…アイツいんのか…。

アイツは隼人のこと好きらしいから…隼人は今、地獄だな。うん。

隼人でも解けないなら時間かかるだろうし、ちゃつちやと行つて、解いて、帰るか。

「ああ、わかった。…とりあえず、頑張れ」

『…サンキュー…じやな』

ピッ

仕方ねえな…。

そして、一回だけため息をつき、沢田家に向かつた。

沢田の家に来るの、一回まだなー…。

「やがて、お母さん。

」

オレ的には、あんま嬉しくない。むしろ嫌だ。

ま、もうなかなか来ないだろ。

「よつ隼人」

「おう。早かつたな」

「か…風間？」

「「風間さん！？」「

あ、オレ 隼人 山本 沢田の順な
(ツナと一緒に咲も言つてます。)

それにもしても、隼人はオレが来ることを知らせてなかつたのか?

「あ、別」「ここにナビよ。」

「早速だナビコムだ」

「ピラシ、と見せられたのは間違。

ねこねこ……いろんなのを解こうとしたのかよ……。」

「……何で」「こんな問題解いてんだ……？」

「あ、その……オレ達の宿題なんですよ……」

沢田達二つーと……三枚あるし、沢田、山本、アイツだな。

補習で出されたのかー。」

「解けるんだけどよ……」いや 超大学レベルだな……」

「 「 「 「 …? 超大学レベル! ? 」 「 」 」

「うるさい……。

「ああ……答えはー。」

ネコジャラシの公式で『4』だな

こんなのを補習の課題として出すなんて……教師も解けるかどうかギリギリだぜ?

「ネコジャラシの公式って何だ?」

「隼人はもしかしたら知ってるかと思ったんだけどな……。」

んー、コレが公式な

サラサラッ。

「…？」

「あ、説明するよ。

コレが元で

んで、公式になる

「なるほど…」

あー、周りは全く理解できないな…。

ま、別に関係ねーしこうか。

「とりあえず、答えは4だろ?」

「なら、それだけ書いときや大丈夫なのな」

山本……本当は途中式も書かなきゃダメだけどな……。

「んじゃ、オレは帰るな」

「待て」

「……オレ、早く帰りたいのに何の用だよチビちゃん」

「本当だぜ?」

「わざわざ家に帰つてダラダラとしたいんだからさ。」

「何でネコジヤラシの公式を知ってる……。」

「オレは大学でも留つた留わないかの問題だぞ」

「オレの前のガツコは超一流なんだよ。

聞いたことねえ？ 小、中、高、そして希望の奴は大学と大学院までエスカレーター式の学園」

十雅に、オレの通つてた学園はこの世界でも存在させたつてことを聞いた。

同じレベルとして、だ。

「南…それって『帝都王儀林学園』か？」

「あ、さすがに分かつた？」

そりゃうそ、山本（と、咲）の顔色が変わる。

「え…！？あの帝王かよー？」

「そーだけ?」

「て…帝王?」

沢田は知らねーの?

「ソナ知らないの? 日本一の学校で、世界でもトップの学校だよ?」

あーあーあーあーあーあーあー…。

今、何か聞こえた?

聞こえたとしたら、氣のせいだぞ!?

「あやか…あの帝王…?…?…?」

「で、でもよ南…何で並中なんかに来たんだ?」

あ、隼人が沢田の言葉無視したよ…。

「オレ、もう帝王の大学院のテストを満点取つりまつたんだ。

そんで、中学に最初は行つてたんだけビ…。

つまんないから、それならフツーのガツコ行いひつと思つてな

あ、この世界のオレの情報は前世の続きをになつてるんだよ。

情報を入れておいてくれてよかつたよ…。

オレは前世で満点取つていて、自由登校になつてたんだ。

あ、制服は男子はズボンで女子はスカートかズボンか自由だつたんだ。

高校までだけどな。

そつからは私服…って決まりだつたハズだ。

んで、どのくらい頭がいいかはネクタイの色で決める。

小学校は赤。

中学、青。

高校、黄。

大学、緑。

大学院、橙。

つて決まり。

オレは紫。

これは大学院をクリアしたレベル。

初めて作った色らしい。

緑までなら今までに2人いたんだとよ。

まあ、その2人も超ガリ勉で高3の一月に取つたってウワサだった
がな…。

ただ、帝王のレベルだから…。

帝王の赤ネクタイをしてる奴なら普通の高校くらいの問題はココ一
で解けるレベルだ。

あ、オレはメンディのが嫌いだから勉強してないぜ？

「やっぱ南か…」

隼人？何がだよ。

「何が？」

「これだ…見てみろ」

渡されたのは、雑誌。

見開きが開かれてる。

『帝王の大学院をわずか11歳で卒業!!
今までの、そしてこれからの人類の中でトップの天才!!』ナミ・
カザマ!!』

…なんじゃこりゃ…?

オレの写真とか載ってるし…。

「写真はダラダラしてる時だけど、インタビュー記事がオレの言葉
とは思えない気持ち悪さ。

うえ……気持ち悪…。

「……オレ、いろんなインタビューされた覚え無い……それに、このインタビューの答え……キモ……」

「オレも最近読み返したら見つけて、違つと思つたんだけどな……。

でも顔がオマエだから、会つて聞いて聞こいつと黙つて持つてたんだ」

ん……インタビュー……？

「あ……思つ出した」

「やつぱ南だつたか？」

「いや、オレが大学院の卒業証書貰つて一ヶ月位経つた頃、メチャクチャ人が来て……。

追い払つたんだけど一社だけしつこいから、『勝手にやれ』つつたんだよ。

でもこんな風になつてるとほんの一

そーだつたよー…。

にしても、気持ち悪すわあんな。

うん。イリつく。

「やつぱなー…つて南つて世界で一番頭いいんだぜー?」

何でそんな性格なんだよー…血腫とかもしねーし…

「メンディから」

「「「なんか納得」」」

おこじら、納得すんなら聞くな。

(南は基本、この中では隼人以外の人に対する反応しません。)

「やつぱな。じゃあもう帰つていーぞ」

やつぱなつて思つなら呼び止めんなよ…チビちゃん。

「ハア…じゃあ帰る」

こいつしてオレが帝王に通つてたことが広まつた。

同時刻、職員室でもバレた…。

応接室の人達は、とつくに知つていたらしいがな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6945y/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 自由な風、来る！～改～

2011年12月1日15時46分発行